

「暗黙の背徳世界」からの告発

——岩波明『狂気という隣人 精神科医の現場報告』



佐野真一

この本は、狂気の凶暴性と、それとは裏腹の狂気の蠱惑性（こくわくせい）にあらわれている。

「古い刑務所のような荒れ果てた暗い建物の中を歩いて行くと、鉄格子で遮断された部屋があり、その中にはいつも奇怪な大声をあげ、だれかれかまわず殴りかかってくる人物が収容されている」

都立松沢病院に八年あまり勤務し、夥（おびただ）しい数の精神病患者に接してきた著者は、一般の人びとはいまだ、精神病に関してそんなイメージをもっているのではないかと、言う。その上で、だが、精神病はそんなに特殊な病気なのか、と読者に問いかける。

「精神が不安定になったとき、周囲の人たちが共謀して自分を異にかけているように感じたことはありませんか？ そんなばかかなことはあるはずないとわかっているにもかかわらず、通りすがりの人々から悪意の視線を浴びせられた気がした経験はないでしょうか？」

精神科の疾患は過酷で、患者や家族の生活を破壊し、生死すら左右しかねない。しかし不思議なことに、その一方で、彼らにはどこか懐かしい雰囲気があり、白昼夢に出てくる幼年期の風景と似たところがある。西欧では十九世紀初頭まで、精神病院は入場

券さえ買えば誰でも入れる庶民の娯楽施設だったという。それが題名の「狂気という隣人」の意味である。まさに人間は、狂気と正気が同居する厄介な動物である。

本書の一番の収穫は、臨床医の視点で狂気にまつわるタブーを直視し、世間から忌避される精神病患者たちを、魅力ある存在として数多く登場させていることである。

救急の精神病患者たちは、灰色のビニール・シートでぐるぐる巻きにされた状態で病院に運ばれる。舌を噛み切る恐れもあるので、猿ぐつわを施されていることもある。

それでも興奮がおさまらない場合、五、六人がかりで両手両足を押さえつけ、鎮静剤を注射したり、時には電気ショックをかけなければならぬ。警察官の任務は病院に患者を搬送した時点で終わるため、あとはすべて医者の仕事となる。そこで関係者たちが直面するのは、「司法」と「医療」の間に横たわる、誰もが放置してきた暗黙の背徳世界である。

「警察としては、精神障害者をいくら取り調べても、最終的には刑事事件にならず、精神病院に収容することになるため、取り調べ自体意味がない」と考えているのです。（中略）警察がいったん

「精神障害者」と認定すると、その後の扱いは病院任せになり、病院が治療の必要はないといつても、再び警察が扱うことにはなりません」

「司法」が精神病患者と認定すれば、その後の処置は精神病院の「医療」にすべて委ねられるという矛盾。ここから精神病院には殺人歴のある者が多数入院し、いわば院内に「野放し」にされるという異常事態が出来る。現制度下では致し方ないこととはいえ、次のような殺人事件が精神病院内で頻繁に起きていることを知れば、どんな「人権派」でも、精神病患者に対する法の不備について考え直さざるを得ないだろう。

身長一六〇センチに満たない精神分裂病患者が松沢病院に運ばれてきた。彼は松沢病院に来るまで三度殺人を犯していた。最初の犯行は、千葉県の精神病院に入院中の外出時、新宿の路上で通りすがりの女性を何の理由もなく刺殺した事件だった。二度目以降は、精神病院内での殺人事件だった。いずれも「心神喪失」のため、免責処分された。いわば彼には、いつでも罰を受けずに罪を犯せるスイッチが入っていた。

松沢病院に送られてきた男は、やはりそこで四度目の殺人事件

を起こした。男は保護病棟に長期入院している患者が「うるさいので殺してやろう」と思って部屋に行き、ベッドの上に押さえつけ、おとなしくなるまで口の中にティッシュペーパーを一枚ずつ詰め込んで窒息させた。サイコパス・キラーならではの「耽美的」な殺人というのはい過ぎだろうか。

著者はこうした例をあげながら、英国のような保安施設が日本にも必要であり、彼らを管理することは医療だけでなく、国家と社会の重要な役割ではないかと主張する。

「触法精神障害者に対する強制入院、隔離や拘束に対する最終的な責任は、医療ではなく法があたるべきであると私は考えます。患者の治療を促す役目の医師が、同時に患者を拘束し長期入院を強いるのは、医療的にも心理的にも矛盾する」

勇氣と説得力ある告発と言つてよい。この精神「医療」の現場報告から浮かびあがってくるのは、ただ精神科の医師たちに問題を丸投げしてきた「司法」の欺瞞、すなわち正気と信じて疑わな

いこちら側に居る者たちの狂気によく似た精神の歪みである。

（さの・しんいち ノンフィクション作家）

憲法調査会証言集 国のゆくえ

田中良紹 編
新刊 2100円（税込）
石原慎太郎・小田実・松本健一・渡部昇一・孫正義・姜尚中・市村眞一
の各氏が語る「二十一世紀の国の姿」。憲法改正が現実味を帯びている現在、
立場の違う七氏の発言は憲法を考える上で大いに議論を呼ぶだろう。

稲川明雄 著
新刊 1680円（税込）
シリーズ 長岡藩

江戸期全国に三百の大名家があり、独立公国として独自の文化と人材の育成に勤しんでいた。その気質は日本人の原型ともなっている。戊辰の戦い、雪の重みをも糧として、立ち向かう長岡人の源流を探る。

スペイン語の贈り物

福島教隆 著
新刊 2310円（税込）
NHKラジオ「スペイン語講座」の人気講師が広大なスペイン語世界を案内する語学読み物。欧州から南米にわたる多様なラテン文化を言語を軸に明るく平易に語る。初級者から中級者向き。文例多数掲載。

フオービギナーズシリーズ 98
好評既刊 1260円（税込）
ヤマトタケル 文・鈴木邦男
絵・清重伸之

古事記では倭建命、日本書紀では日本武尊、悲劇の皇子ヤマトタケル。騙し合い、殺し合い、愛し合った神々の話はこれまで書いてきかた（禁断の物語）であった。鈴木・清重が新たなタケル像を創る。

現代書館

東京都千代田区飯田橋3-2-5
電話03(3221)1321 FAX03(3262)5906
http://www.gendaisokan.co.jp